

ぼいす

14



春期企画展

江戸のリッチモンド あこがれの王子・飛鳥山展

■会期：2005.3.19(土)～5.8(日)

■会場：特別展示室・ホワイエ・講堂

■観覧無料

遥かなる眺め



テムズ川河畔のリッチモンド風景

幕末維新期に訪れた外国人から
ロンドン郊外の景勝地・リッチモンドと並び称
された遊園空間…王子・飛鳥山
人々を魅了した当地に存在した往時のガーデ
ニングとグルメが現代によみがえる・・・



江戸のリッチモンド あこがれの王子・飛鳥山展

観覧無料

◆幕末、はるばると日本を訪れた外国人の人たちが賞賛してやまなかったものに飛鳥山からの眺望と、王子・滝野川の景物があります。プラント・ハンター、ロバート・フォーチュンは、その著作『幕末日本探訪記 江戸と北京』（講談社学術文庫）で王子を、「日本のリッチモンド」と呼んでいます。リッチモンドとはロンドン近郊の緑したたる景勝地で、18世紀から貴族の邸宅が立ち並び高級住宅地でした。リッチモンド・ヒルからテムズ川を見渡してみると、多くの錦絵が描くところの王子の風趣あふれる景色と共通するものがあることに気づきます。かたやテムズの上流。かたや荒川の悠然とした流れ。どこまでも広がる平野と森が都会に倦んだ気持ちを伸びやかなものしてくれます。

まったく実際のところ、18世紀初期の吉宗の飛鳥山桜植樹以来、江戸の人びとの関心を集め景観への憧憬を記さずにはいられないほど、たくさんの錦絵や詩歌によって、この地は表現されてきました。それではこの景観への思いを統べる王子・飛鳥山・滝野川とは、いったいどのような場所だったのでしょか。

◆江戸時代、現在の北区域は16村1宿に区分され將軍家の鷹場村落に編成されていました。同時に各村内部は寺社領・旗本所領の入り交じる複雑な支配形態におかれていました。しかし、江戸近郊の滝野川・王子は水稲耕作のほかに滝野川ごぼう、にんじんで名高い種苗業や換金性の高い蔬菜生産の場で比較的に豊かな地域でした。しかも徳川吉宗の行った都市・江戸周縁部に対する遊園整備政策の一環として桜や楓が大量に植樹されるや、修景を施された王子・滝野川地区は庶民行楽の場となり四季折々の景物に恵まれた名所として世に広く知られるようになりました。また下屋敷などの大名庭園への花卉供給に端を発した染井・棠鴨の植木屋の活動は江戸後期になると園芸品種の生産、改良

の一大拠点を形成し、社会階層を問わず江戸の人々に親しまれた植物への思いに応えるグリーン・ゾーンをかたちづけたのでした。

◆このたび北区飛鳥山博物館では「江戸のリッチモンド あこがれの王子・飛鳥山展」を開催することになりました。この企画展では「日本のリッチモンド」とまで呼ばれた王子の魅力、北区初公開の歌川広重肉筆三幅対・対幅をはじめ、

トロイア発掘で有名なシュリーマンなど北区を訪れた外国人の見聞記や、錦絵、植物輸送ケースの復元資料など、多彩な120点の資料が一同に展示されます。どうぞ春の飛鳥山にいらっしゃってください。（石）



●ギャラリー・トークのご案内

「かつてリッチモンドと呼ばれた町から未来に向けて

…今、考える環境問題と景観」

日時：3/19(土)・20(日)・21(祝)、4/16(土)・17(日)・30(土)、5/1(日) 各13時～13時45分

定員：30名 会場：特別展示室

講師：石倉孝祐(担当学芸員)

受付：当日12時から整理券を配布します。

あるく、みる、ま

石神井川の旧河道跡

王子本町地区と滝野川地区の境を西から東へと流れる石神井川の沿岸は、今は遊歩道として整備されており、川の水面に遊ぶ水鳥を眺めながらの散歩など、都会にしてはゆったりとした時間が楽しめる。そんな川沿いの道をぶらりぶらりと歩いていく途中、川沿いにいくつかの緑地があるのだが、ふと四角い土地区画ではなく曲がった形の敷地であることに興味を湧いた。実はこれらの緑地はもともと蛇行していた石神井川の流路をカーブが少なくなるように改修した結果、川の水を流さなくなった旧流路のなご

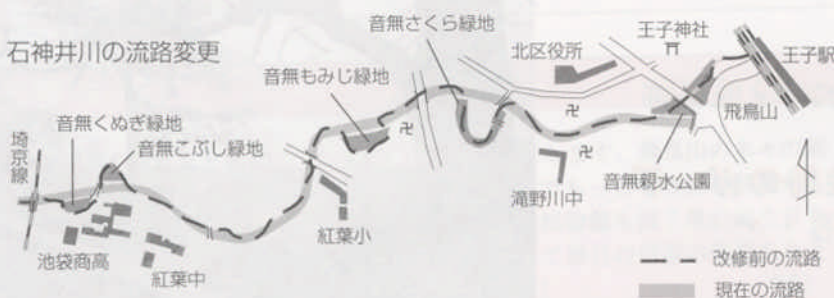
りなのである。地図で見ればこれらが川に接したU字形をしているので、なるほどと合点がゆく。江戸時代にはこのあたりの石神井川の流域は滝が多く緑豊かで、名所として数多くの錦絵が描かれたところである。もともと台地を深く侵食しつつ流れる幅の狭い河川で、周辺の田畑には貴重な水の供給源であったが、明治時代以降、流域が急激に市街地化すると、舗装のために台地にしみこまない雨水が大量に流れ込むようになった。水害が頻発するようになり、特にカーブの多い地域は勢いで曲がりきれない水が市街



カモが群れる音無もみじ緑地の池。右奥が現在の石神井川の流路。

地に流れ出たという。

結局、護岸工事や流路の整備が昭和30年代から40年代にかけて行われ、現在のような景観となったのである。コンクリートの高い壁に囲まれ、川というよりは水路と化した流域はかつての名所としての景観は全く失った。しかし、その後の遊歩道の整備や旧河道跡の緑地化などの試みが新しい石神井川の景観を生むこととなり、現在では多くの人々に散歩コースとして再び親しまれるようになっていく。（F）



大地・水・人

鈴木直人

かつてそこに海があったころの記憶

北区の地形は大きく台地と低地に分かれる。今では台地側も低地側も建物が立ち並び、地図を見ただけではその高低は分かりにくい、確かに現地を訪れると15m程の比高差の崖が存在する。ちょうど、京浜東北線を境にして西側が台地、東側が低地と大まかに分けることができよう。その低地にはかつて海が広がっていた時代があったことをご存知だろうか。今、そこを歩いて地面が砂っぽいわけでもなく、ましてや海の香りがすることもない。しかし、北区の地面の下にはそこがかつて海であった記憶が眠っている。それを少し掘り起こしてみよう。

時は少しさかのぼり、今から21年前の1984年のことである。その前年より東北新幹線の上野開業に伴う事前の発掘調査が行われていた。場所は上中里駅の東側で約1kmにもおよぶ、中里遺跡である。そのN地区と名付けられた発掘区で洪積層が浸食された波蝕台・波蝕崖が検出された。打ち寄せる波によって硬い地層が徐々に削られたもので、縄文時代前期(約6000年前)の頃のできごとである。これは、この時期に低地に海が広がっていた、まさに動かぬ証拠である。この頃、飛鳥山には数軒の住居によってムラがつくれ、人々が暮らしていたことが発掘調査によって確認されている。その1軒の住居址の中からカキやハマグリなど多くの貝が出土した。おそらく、眼下に広がる海で採取してきた貝をムラまで運び、食べ終えた貝殻を使われなくなって埋もれかけていた住居内に捨てたのだと考えられる。

先の中里遺跡の発掘調査では一艘の丸木舟が出土している。P区と名付けられた発掘区の砂層中に埋もれるように丸木舟は横たわっていた。土層の関係から縄文時代中期初頭(今から約4700年前)のものであることが確認された。全長約5.8mにもおよぶ大きな丸木舟があったその場所は当時の砂浜であったと考えられる。これだけの舟をムラのある標高差15mほどの台地上からいちいち持ち出したり、わざわざ持ち帰っていたとは考えにくい。舟は砂浜の岸辺に置かれていたのであろう。この丸木舟の活躍していた縄文時代中期の海が比較のおだやかであったことは、堆積層が砂層であることからわかる。きっと「中里海岸」の渚が台地の崖下に続いていたのであろう。

この海を舞台に縄文人は活発な活動をしていたようだ。それは中里遺跡のすぐ近く、中里貝塚から多くのことを知ることができる。この貝塚は幅が100m、長さは1kmにも及び日本最大規模の貝塚である。調査した中では貝の堆積がなんと最大4.5mにもおよぶ。その種類はカキとハマグリにほぼ限定され、他の種類の貝や魚骨、土器や石器の破損品はほとんど含まれない。どうも縄文人が「中里の海」で計画的にカキとハマグリを採取し、現地で加工した後に殻を捨てた結果、貝塚となったようなのである。貝塚のすぐ隣からは一度に多くの貝の身をとりだすための施設(木枠付土坑)が見つかっており、いわば縄文時代の一大「貝加工工場」と産業廃棄物による「埋立地」とでもいえようか。とり出した大量の貝の身は「干し貝」にし、内陸のムラとの間の交易品にしていたのではないかという考えが有力である。この中里貝塚は約500年間を通じて形成されている。「中里の海」はそれほどまでに人々を魅了した一大カキ・ハマグリ名産地だったのだ。と同時にこれだけの長い間貝を採り続けているということは、豊かな海の資源を有効に、そして大切に、それを次代へと受け継いでいたことが伺えるのだ。何か今の我々へのメッセージとも受け取れないだろうか。

今から6000年前の縄文時代前期。確かにそこには海が広がっていた。そして縄文時代中期に人々は海を舞台に生き生きと暮らしていた。そんな豊かな海も地球の寒冷化によって次第に退いて行く。低地が陸地化し人々がそこに居を構えるようになるのは次代の弥生時代も終末になってからである。これ以降、海の記憶は土の中に封印されてしまう。

明治29年頃の低地の様子



●明治29年の頃の低地の様子
手前の半島状に見えるのが中里貝塚。表面には白く貝殻が散布していたという。遠くに見えるのが下総台地。その間にかつて海が広がっていた。
(『東京人類学会雑誌』第11巻121号より)

～ 錦絵から声を聴く ～

飛鳥山は、いわずと知れた桜の名所。そこに訪れる人も時代によってさまざまです。
今回の特集は、江戸～大正時代までの飛鳥山での花見風景の中から、
飛鳥山碑にズームインして紹介します。

さてさて、どんな人が何をしているのでしょうか？ ちょっと聞き耳を立てて見ましょう…。



(拡大)

東都名所 あ須可や満花盛(天保11年)
「これこれ、これが有名な飛鳥山の碑でござろう」
「ほんに見事な碑だよ。なんて書いてあるんかいな」
「これ、わたくしが読んで進ぜよう。そもそも…」
三人のうち、頭巾に羽織姿は文人か。煙管片手は粋な役者か、お立会い…。
★天保12年は、まさに天保の改革が開始された年。しかしながら成熟しきった人々の遊楽パワーはとどまることをしらず、飛鳥山へもその人々の波はとどまることを知りません。



(拡大)

江戸名所 飛鳥山花見乃図(嘉永6年)

「飛鳥の桜は、ほんに見事」
「これこれ、これでござんしょ。うちの亭主が言うてた碑。」
「ほんに大きな石だこと。読めぬがほんに口惜しや。」

連で繰り出した見物客。三人よればかしましいとかいう女性ばかりのにぎやかさ。姿形も美しい客に桜も恥じ入るばかり…。

★江戸の文化はより多彩となり、季節を問わず遊興空間へと繰り出す「行動文化」への流れは加速していきました。天保期からはじまった「伊勢参り」しかり、「連」を組んでの集団行動はますます盛んになっていきました。

コラム

描かれた景色を変化球で捉えてみよう

飛鳥山之碑は、成島道筑の手によって、元文二年(1737)に建立された碑です。徳川吉宗による飛鳥山開発を賛美し、後世にその功績を残すために建てられました。その文章は難読であって、当時の庶民はそのことをよく知っていました。それを証拠に、当時流行した川柳にも読んだフリをしたがゆえにおこる滑稽な出来事が、おおく詠み込まれています。

江戸時代に描かれた錦絵には「飛鳥山碑」の文字が読み取れるものが多くあります。たとえば勝川春潮の「飛鳥山花見」などです。これはとくにおよその文面を詳細に描いています。

ところが明治期に入ると「櫻花盛」や「東京名所」などといった文字で、飛鳥山公園の名所性や遊園性を示すケースが多くなります。それは描かれ方の変化であって、専門家によって様々な研究されていて、いまさらここで問うものではありません。けれどもそこに、自分なりの物語を重ねてみると、違った興味がわくものです。

春の盛りの飛鳥山で、普段見慣れた碑に見入るとき、歴史背景に思いを馳せて、古人の気分酔ってみる…。嘘か真か、これまた春の一興とご高覧いただければこれ幸い。(洋)



(拡大)

東京名所 飛鳥山桜盛(明治9年)

「これが江戸より伝えられたる石碑とか」

「そうそう、これも東京名所とあいなった」

絵の右側には着物姿の見物客。それとは対照的に石碑を眺めるこの男性。ステッキやアンブレラ片手にソフト帽をかぶるその姿は、まさに文明開化の音がする…。

★維新後の明治6年(1873)、1月15日にだされた公園選定の布達をうけて飛鳥山がわが国最初の公園として指定されました。他に上野、浅草、芝、深川もこのとき指定を受けました。その歴史は現在にも脈々と受け継がれています。

東京名所鑑 王子飛鳥山之図(明治23年)

「いいちゃん、これにはなんて書いてあるんだろ?」

「どれどれ、むむむ…これはお前さんにはちいと難しいわいな…」

めがね片手に石碑を読むも、難解不読の漢詩を前に、おじじの権威も地に落ちる?

★幕府の権威はもはや見る影もなく、近代化への道へまっしぐらであった明治時代。まさにその風刺かと思うような姿です。この時期、庶民の多くは戸惑いを感じながらもその流れに身をまかせていきました。そのなかで、江戸の香りを残しながらも近代化のひとつの象徴となった飛鳥山は、庶民にとって心休まる空間だったのかもしれませんが。

※聞こえてくる声については、想像の域を超えません。悪しからず…。



(拡大)



ぼいす

博物館にとって、そのロケーションは重要な要素の一つです。それは来館者が日常の喧騒から離れ、心のスイッチを切り替えて、展示への期待を高める「間(ま)」が望まれるからです。その意味において、緑豊かな広い公園、あるいは歴史的な町並みは博物館の立地にふさわしい場所とされています。

当館は館名が示すように飛鳥山公園内に位置していますが、この立地は当館にとって最大のメリットと言えるでしょう。その理由として次の5点が挙げられます。①飛鳥山は八代將軍吉宗によって開発された遊園であり、歴史ある地であること。②飛鳥山周辺には近世以来の名所が集中していること。③区内最大規模の面積をもつ緑豊かな地であること。④現在も花見の名所として周知されていること。⑤JR・都電・バスなどの駅や停留所が近くアクセスが良いこと。

当館では当初より①、②の点を重視し、飛鳥山

とその周辺環境全体を学習の場ととらえて展示内容に反映するとともに、講座等においても利用者の関心が館外へ向けられるように意識して活動を行なってきました。また③～⑤の点も、都内の公立博物館として当館は非常に恵まれています。飛鳥山はJRの駅に隣接している公園であり、当館ほど「駅近」かつ緑に囲まれた博物館はそう多くはありません。花見時にはJRのみならず都電やバスを利用して広範囲から公園利用客が訪れ、その際に当館の存在を初めて知る人も実際少なくはありません。当館が年間7万人前後の入館者を維持しているのは、立地の好条件によるところも大きいと考えています。

昨年春、当館は館外でアンケートを実施しました。そこで来館したことがない人に対し「どういっきっかけがあれば博物館に行きたいと思いますか?」と質問したところ(複数回答可)、多かった回答は①楽しそうな講座・イベント(約

飛鳥山公園と博物館

久保栞企美子

50%)②面白そうな展示(約46%)③飛鳥山に行くついで(約45%)の3つでした。当館は飛鳥山に立地する「幸運」に依存するのではなく、飛鳥山公園にとっても当館の存在がメリットとなるように、魅力的で活発な博物館活動を展開していくことを期待されているのです。



北区は鉄道交通には昔から非常に縁があり常設展示でも取り上げられていることから、夏休みワクワクミュージアムの一環として、平成10年の企画展「トラムとメトロ」の際に一度行ったことがある地下鉄都電車庫見学会を再び開催することにしました。ただ、以前と異なり地下鉄については都営三田線の代わりに東京メトロ(旧営団)南北線にしました。

7月22日(木)は東京メトロ南北線の見学日です。当日は晴天にめぐられました。車庫名は正式には王子検車区といい、王子神谷駅から10分ほど汗を拭きつつ歩くと施設に到着です。入り口には大きく歓迎の掲示がされており一同大感激!2班に分かれて早速見学開始です。まず、地上搬入口(漫才でお馴染みの地下鉄が入った所)を確認してから地下3階へ降り車両に取り付けられているクーラーの清掃作業(クーラー職場)や自動洗浄機等を見学しました。その後、9000形車両の前で記念撮影。運転席に実際に座らせてもらいムードも最高潮です。最後に車両の定期検査(月検査)作業を見学し終



運転士の気分になれるかな?



これがパンタグラフか!

了しました。

7月29日(木)は都電荒川線の見学日です。車庫名は荒川電車営業所及び荒川車両検修所といい、荒川車庫前の電停を降りた所にあります。2班に分かれて早速見学開始。構内には次々と現役車両が出入ります。工場に入っすぐ受電部(パンタグラフ)の上げ下ろしを実際に体験して子供たちは大興奮!その後、台車の点検作業・車両移動装置(トラパーサー)・旧型車両5500形等の順に間近で見学していきました。最後に応急作業車と運行システムの説明を受け終了しました。当日は台風の影響で断続的に豪雨が襲来し心配されましたが、幸いにも見学中は雨に濡れずにすみました(晴れ女がいたのかな?)。

懇切丁寧な説明やお土産にいただいた各種資料の手配など施設の皆様方には本当にお世話になりました。もし可能であれば、今後も見学会を継続して行っていきたいと思います。(守)

昭和二十五年 給食の情景

写真に見るあの日の時

当館には昭和26年版の「北区史」の編纂の際に収集された写真が一括寄贈されている。それらを見ていくうちに、ふと目に留まったのがこの一枚。昔の小学校の給食の風景のようだが、パンをほおばる子ども達の表情がイキイキとしていて実に良いではないか。お皿によそってあるのはカレーのようなものか?後ろに立っている教師らしき男性の一人がスーツの上から割ぼう着をつけているのも微笑ましい。見た瞬間からなんだか妙に惹きつけられてしまった。

この写真の背景を知りたいと思い始めたところ、後ろの壁に張ってあるものがカレンダーであり、「昭和25年1950年」と書いてあることに気付いた。さっそく「北区教育史」で戦後の給食事情を調べてみると、終戦直後の食糧不足によって子どもの体力の低下が深刻化していたようで、政府はGHQによる給食実施の勧告もあって、昭和22年に連合軍の放出物資にたよって学校給食を開始したという。ただし、はじめは実施できた学校数は少なく、また、メニューは脱脂粉乳のみだった。東京都で完全給食制度が実施されたのが昭和の25年なので、この写真が撮影さ



笑顔がまぶしい給食の風景。小学5年生の教室。学校名は不明。

れた年と一致する。確証は無いが、ひょっとするとこの写真は子ども達と給食のはじめての出会いの風景なのかもしれない。そう思いつつあらためてしげしげと見ると、子ども達の嬉しそうな表情に納得。今の給食に比べれば大変質素だが、当時の子ども達にとって給食の味は格別なものだったに違いない。(F)

博物館インフォメーション

春の飛鳥山桜情報

「白雪」「麒麟」「福祿寿」。これってなんだかわかりますか?日本酒の銘柄?いいえ、実は桜の種類なんです。みなさん桜って言うと「染井吉野」を思い浮かべると思いますが、そのほかにもいろいろな種類があります。飛鳥山にはもちろん「染井吉野」もありますが、上記の三種類や「普賢象」「関山」「御衣黄」「一葉」「日暮」といった種類もあります。中でも変り種は「御衣黄」で、薄緑の花を咲かせます。薄緑の桜であるだけでも十分変わっているのですが、日にちが経つにつれて花びらに紅い線が浮かび上がり、色が変わったように見えるんです。不思議ですね。3月には「染井吉野」がみごとに飛鳥山を彩ります。でも4月の入学式ともなればもう桜吹雪になってしまうのですが、飛鳥山はそれだけでは終わりません。ちょうど交代するように「関山」などサトザクラが見事な花を咲かせます。このころは木の下の宴会のほとぼりも冷めてくる頃ですので、じっくり



と桜の鑑賞にこられてみてはいかがでしょうか? (直)

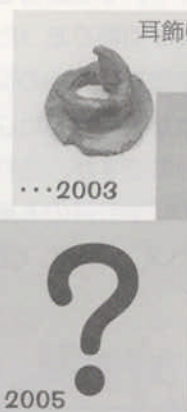
◀ 満開のサトザクラ

★ セレクション5 ★

初夏の“定番”となったスポット展示「セレクション5」が今年も登場します。

スポット展示は学芸員による手作りの小規模な展示のこと。一つのテーマに絞って実施することもあります。この「セレクション5」では数名の学芸員が収蔵資料の中から1・2点ずつ、計5点の資料を選び、1点1点を丁寧に紹介します。今年も3人の学芸員が担当し、それぞれのテイストと切り口で資料の魅力を引き出していきます。

例年、皆さまに驚きと発見を感じていただけるようにと、珍しい考古資料や入手したばかりの浮世絵、貴重な地域資料などを出し惜みすることなく出展し、過去には戦前の鉄道旅行案内コレクション、明治時代の染付け便器(!)、王子で作られていた妙薬「王子五香散」の実物



などなど、「セレクション5」で初めてお披露目した資料も多数あります。今年はどうな資料にスポットライトが当たりますことやら…見てのお楽しみです。

初夏の飛鳥山を散策の折はぜひ展示室をのぞいてみてください。そしてモノとの素敵な出会いを楽しんでください! (K)

*昨年ご好評をいただいた各資料の展示シート(カラー版)を今年も配布する予定です。

お客様の声

館の催し物にご参加いただいた方々からの“ほいす”をお届けします。

企画展「赤羽台の横穴墓」より

「ほぼ全身の人骨を見たのははじめてだったので驚きました。なぜこんなにきれいに全身の骨が残っているのかすごく不思議で、もっと知りたいと思いました」 (20代女性)

「八幡神社、星美学園、国立王子病院あたりは、子どもの頃の遊び場でした。そこにこのような史跡が多数あったとは、面白いです」 (60代男性)

おっしやる通りです。歴史は今も、足元に眠っているのです。(編)

「実際、穴に横たわってみたかった」(40代女性) げげっ! (編)

「骨がリアルで怖かったです」 (20代女性) で…ですよねえ…。(編)

講座「第2回 はじめての北区めぐり」より

「北区に住んで15年近くになりますが、「ねくら」としてのだけで右も左もわからず、定年後やっと近くを歩いています。これからも参加したいです」 (?代男性)

地元とはそんなものなのかもしれません。まさにあなたのような方の為のこの講座。今後も一緒にできま

すように!(編)

講座「南関東横穴墓めぐり」より

「横穴墓など、レクチャーしていただかなければただの穴。しかし参加して、色々考えるきっかけを与えていただいたと思います」 (50代男性) 「『百聞は一見にしかず』のことわざ通りでした。古代人の方々の技術も大したものですよ」 (60代女性)

「興味シンシン、今後おおいに勉強したい!」 (60代男性) 興味を持っていただけて何より!講師冥利に尽きるというものです。(編)

講座「ビクトリアル北区」より

「2回で終了するには惜しい内容でした。あと2回くらい続けられる資料を有しておられたのではないのでしょうか?」

「景観構造の視点から見ると、見慣れた浮世絵や絵葉書が、又面白く見ることができました」

学芸員の腕の見せ所は「点」である資料をいかに「線」にするかです。そのためには体力と時間が必要なのです。日々努力中ですので、ぜひ次回をお楽しみに。(編)

学校対応展示&体験学習「来て、見て、さわって!むかしの道具」より

「火を使うことで、子どもたちも“落ち着いている”とはいえない状態”で心配しましたが、生き生きと最後まで興味をもって参加できました。火吹き竹をくらくらするまで吹いたこと、団扇をバタバタ、餅を見ながら扇いだこと、とても楽しかったです。お餅を食べたときには「ゴール!」という感じで最高でした。みんな満足して帰りました。3学期早々ということで学習の始まりとして位置づけました。ありがとうございました。」 (八幡小の先生)

協力して成し遂げた体験学習が、その後の学習の一助になれば幸いです。来年もお待ちしています!(編)

「ステンレス流しやダイニングテーブルなどは、まさに子どもの頃に使っていたものです。それが昔の道具になってしまったとは…複雑な気持ちです」 (40代?女性)

まったくです。今この瞬間にある全てのものも、やがて歴史になりますね。(編)

「目が不自由な子なので触れるのが良かったです。本人も大満足でした」 (30代女性)

「3年生の時に来たけれど、2年経って来て見ても楽しかったです」 (区内小5年生)

それはよかった!毎年新しい工夫をしていくので、来年も又きてね!(編)

春

- ◎春期企画展「江戸のリッチモンド あこがれの王子・飛鳥山展」(～5月8日)
- ▽野外見学会「日光御成道をたどってみよう」(4月29日)
- ◇講座「第5回初級考古学講座 考古学をはじめよう5(ムーンライト編)」(5月12日・19日・26日・6月5日)
- ◎スポット展示「セクション5 ☆2005☆」(5月21日～6月19日)
- ◇講座「快読!江戸名所図会」(5月28日・6月11日・25日)
- ◇講座「第8回新聞から読む考古学 2005年 Part1」(5月29日)
- 16mm映画会&トーク「都電の在りし日」(6月12日)
- ◇講座「年中行事<七夕>を知る講座」(6月19日)

夏

- ☆イベント「夏休みわくわくミュージアム05」(7月20日～8月31日)
- ◇講座「ムーンライト・ミュージアム・トーク～王子にちなんだ音曲・芸能～」(7月8日)
- ◇講座「中世入門3」(7月9日・23日)
- 16mm映画会&トーク「台風・水害の歴史を探る」(9月4日)
- ◇講座「第9回新聞から読む考古学 2005年 Part2」(9月10日)
- 特別展覧会「第4回人間国宝奥山峰石と北区の工芸作家展」(9月11日～10月10日)
- ◇講座「第2回上級考古学講座 古代人の精神世界」(9月24日・10月1日・8日・15日)

催し物名は仮称です。
詳しくは館発行「催し物案内」をごらんください。

お知らせ

くんじょう
燻蒸のため臨時休館をいたします
博物館の大切な資料を害虫から守るため、6月28日(火)から7月3日(日)にかけて、1週間ほど臨時休館とさせていただきます。よろしくお願ひいたします。

学芸員リレーエッセイ

博物館いるは歌留多

博物館に社会が期待していることはさまざまだと思います。昨今はやりの博物館マネジメントのような堅苦しい議論はさておき、ここは一つオーソドックスに万国共通な一般認識でいきましょう。例えば、外国でも国内でも結構です。今まで行ったことがない場所に旅行する場合、コースに博物館や美術館が意外に多く入っていませんか。博物館が人々の知的好奇心を満たすための施設として整備され1世紀以上経過しています。外国に行くと博物館には老いも若きも旅行客が集まってきます。見知らぬ土地に来た時、まず博物館で見聞を広めてからという習慣は日本よりむしろ欧米で浸透しているように思えます。民族性の違いでしょうか。博物館に来て初めて見て知って驚く。知識では知っていても実物を初めて見て納得する。知っていると思っていたことが実は別物であったことにうなずく等々。こうした一種の驚きを生むことが博物館ならではの役割であると思うのですが、いかがでしょうか。学芸員としてまだ見たこともない資料や新たな価値を発見した時の感動はひとしおですが、これは皆様も同じでしょう。私はそうしたことに心を砕くのが学芸員の本来の姿だと思うのです。今日も又観覧者の“50へえ・100へえ”目指して励むことにします。(守)

へ
えつとき
人が喰れば
しめたもの

利用のご案内

- 【開館時間】
午前10時～午後5時
(有料の展示室への入場は午後4時30分まで)
- 【休館日】
毎週月曜日(国民の休日・振替休日の場合は開館)
年末年始(12月28日～1月4日)
国民の休日および振替休日の翌日(土曜・日曜日の場合は開館)
このほかに臨時休館日があります。



・JR京浜東北線 王子駅南口より徒歩5分
・地下鉄南北線 西ヶ原駅より徒歩7分
・都電荒川線 飛鳥山停留所より徒歩4分
・都バス 第64、王40系統 飛鳥山停留所より徒歩5分

【常設展観覧料】

	個人	団体	三館共通券
一般	300円	240円	720円
小・中・高	100円	80円	240円

- ・小学生未満は無料
- ・団体扱いは20名以上
- ・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館をごらんになれます。

編集後記

今年も春の訪れとともに“ぼいす”14号をお届けします。飛鳥山の木々の間から差し込む日差しが心地よいこの時期は、1年でもっとも心弾む時期かもしれませぬ。そんな中、皆様にて育てていただいた博物館も満7歳の誕生日を迎えます。“ラッキーセブン”の言葉にあやかって職員感謝の気持ちとともにたくさんのラッキーが皆様へ届きますように！(洋)

北区飛鳥山博物館だより
ぼいす 14

発行 平成17年3月20日
編集 北区飛鳥山博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
TEL. 03-3916-1133
発行 東京都北区教育委員会
〒114-0022 東京都北区王子本町1-2-1
TEL. 03-3908-1111(代)
印刷 文明堂印刷株式会社